バニラアイスにエスプレッソをかけて

幸咲満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バニラアイスにエスプレッソをかけて

【Ｎコード】
Ｎ５１７８Ｍ

【作者名】
幸咲満

【あらすじ】
伊達透子（いでとうこ）は甘いものが苦手で、毎年訪れるバレンタインデーもただただ憂鬱な日でしかなかった。
けれどこの日はいつも違っていた。
無愛想で人見知りの激しい透子（とうこ）。
人懐っこく少しずれている千景（ちかげ）。
真逆の性格の二人が惹かれあう。
甘い物をベースにした男女の恋愛物語。

1．チョコレート

たしかにその日は毎年私の気分を憂鬱にさせていた。
甘いものが苦手な私には関係のない日。
高校生の時友人が今日は頑張るんだって意気込んでいた。
それは去年も聞いた同じセリフで。

不思議な日だ。普段は告白する勇気がない子でもこの日には告白しようと一生懸命になる。
彼女たちは変な魔法にかかったのかもしれない。でも私は今までそんな魔法にかかったことはなかったし、これからもかかる予定はない。

毎年繰り返されるチョコレートの日。
いつもと同じはずだった。

けれどその日は違った。

大学生になってはじめての2月14日。今日は御菓子メーカーの思惑にまんまとはまってしまった女の子たちが勇気を奮う日。2週間くらい前からお店のあちこちでバレンタインデーフェアが開催されており、どこからともなく甘いにおいが漂う。きっとこの日のためになれないお菓子作りをした子も多いだろう。そんな健気な女の子たちが少し可愛く思えた。ただ、それは他人事であって私にはまったく関係のないこと。

2月は大学生にとってうれしい春休みだというのに、今日は集中講義をとっていたので大学にいた。春休み中というのにも関わらず、心なしかいつもより人が多く感じられる。大学校内がいつもと違う雰囲気であることが嫌でもわかる。朝すれ違った女の子たちは甘いにおいを漂わせた紙袋を持っていて、それを楽しみにしているのか男の子たちもそわそわしている。
私はバレンタインデーって本当はどんな日だったけかなと考えながら歩いていた。

講義中も生徒たちはそわそわしていた。いつもよりも教室がざわめいているような気がする。窓側の後ろのほうの席に座っていた私はくすくす笑っている女の子たちや冗談を言い合って小突き合いをしている男の子たちを見ていた。

黒板には几帳面に書かれた白い文字。
笹川教授はいつものグレーのパンツに白いワイシャツ、彼のトレードマークでもある白衣を着ていた。
この集中講義は全学部が対象で、環境問題をとりあげた授業である。
私は少しでも多くの単位を取るために、出席するだけで単位をもらえるというありがたいこの授業を受けることにしたのだ。
もちろん環境問題についてそれほど興味があるわけでもなく、私はただただ教授の話を右耳から左耳へと流れるように聞いていた。
はたして今この教室の中でどれだけの学生が教授の熱のこもった話を真剣に聞いているのだろう。前の席から数えてみたがあまりにも少なくてすぐに数えおえてしまった。
「というわけで釧路湿原のタンチョウヅルは1度でもいいから見るべきだ。」
教授の話はいつの間にかタンチョウヅルの話にかわっていたが、タンチョウヅルにも興味がなかったのでしばらく居眠りをすることに

した。

「キーンコーン。」
スピーカーから授業の終わりを知らせる機械的なチャイムが鳴る。
今日で最終日だった集中講義だけれど、みんな名残惜しいわけはなく、授業の終わりを知らせる鐘が鳴ったとたんまだ小言を言っている教授におかまいなく席を立つ学生がわらわらといた。
「よく寝た…。」
うーんと背伸びをして帰り支度をしているときだった。
「ね、伊達さん、これもらってくれない？」
不意に声を掛けられて、それが自分に向けられた言葉なのかわからなかった。
「私も作ったの。よければ食べて！」
教科書をカバンにしまいこんでいた私を囲むように同じ学部の女の子たちが群がっていた。

あれ、なんかおかしい。

そもそも私はれっきとした女で、今日は女の子たちが男の子にチョコレートを渡す日で、それで私はやっぱり女で。
女の子たちが渡してきたものはどう見てもバレンタイン仕様のプレゼントだった。
「え、私に…？」
あまりの出来事に少し気の抜けた返事になってしまった。
「友チョコってはやってるじゃん？って言っても私のは本命だから！友チョコじゃないよ！」
ちょっとふざけたような顔で小柄のショートヘアの女の子がにっこりと笑う。
「なんか伊達さんってあげたくなるような顔してるんだよね。」
「そこいらの男子よりもあげがいがあるっていうか…。」

私は人づきあいが少し苦手で、このポーカーフェイスのせいもあってか近寄りがたい存在だと高校時代の友人に言われたことがある。
2月になったけれど仲のいい友人は今のところひとりだけだ。
なのに今日は少しだけ顔見知りの女の子たちにプレゼントをもらった。
不思議な日だ。
思いもよらない出来事に拍子抜けした私は彼女たちに軽く礼を言うとただぼうっとしてしまった。
私の目の前には可愛くラッピングされたチョコや、おそらく手作りであろうガトーショコラ、有名チョコレート店の高級チョコが並んでいた。
それは少し落ち着いた木目調の渋い机には似つかわしくなかった。
「どうしよう、これ…。」
正直私は甘いものが苦手でチョコレートなんてめったに食べたことがない。あの胸がやけるような甘さはどうしても好きになれなかった。
ため息交じりで独り言をつぶやいた。が、それは突然上から降ってきた言葉によって独り言ではなくなった。

「おれ、食べようか？」

後ろを振り返ると細身の男が立っていた。ゆるいパーマがかかった柔らかそうなアプリコットオレンジの髪。私よりも少し高めの身長。オシャレに着こなした服装。首には黒と灰色と黄色のチェック柄のマフラーが巻かれている。
男はにっこりと笑った。その笑顔はまるで綿あめのようだった。
「そのチョコ。どうしよう、困ったなって感じの雰囲気だったから。」
気さくに話しかけてきた男は私の手元にあったお菓子の包みを手に

とって、
「あ、これ、シェリーのチョコじゃん。有名店の。」
とうらやましそうに言った。
よく見れば彼の手にもたくさんのチョコが入った袋があって、こんなにもらってるのにまだ物足りないのかなと思ったけれど、
「…食べる？」
と私は言った。
「いいの？やった！」
彼はするりとマフラーをとって私の横に座った。
「やっぱりチョコはいいよね。おれ、バレンタインデーが誕生日の次に好きだ。」
初対面なのにぺらぺらと話す男に驚きつつも、彼があまりにも幸せそうに食べるから、おいしいのかなと思って私もコーヒー豆がのっている一口サイズのチョコレートを食べてみた。やっぱり甘かった。
「伊達さん、…だよね？」
私は唐突に出された自分の名前に驚いた。
「…なんで私の名前知ってるの？」
「ちまたの噂。伊達さんは女の子たちにも人気あるんだよ。知らなかった？そこいらの男よりも魅力的だって。男のおれたちの立場もないよ。」
ははっと笑い、人懐っこい笑みを浮かべた。
「えっと、下の名前は？」
「伊達透子（いでとうこ）。透き通るっていう字。」
「へぇ、透子っていうんだ。おれ、楠千景（くすのきちかげ）。千載一遇の千に、景気安定の景でちかげ。建築学部の1年。また困ったときは呼んでちょうだい。甘いもの関係ならとくに！っていうか是非とも呼んでください。」
なんでもっと普通のたとえかたがないのだろうか、逆に混乱すると思いながらも「ちかげ」という名は私の頭の中に新たにインプットされた。

千景は綿あめみたいにふわっと笑って
「ごちそうさま！おれこれからバイトがあるんだ。それじゃあね、透子さん。」
と言って、軽やかなステップで教室を出て行った。

不思議な人だと思った。人が貰ったチョコを食べるなんて傲慢だと感じるはずなのに、千景は許せてしまうような不思議な雰囲気があった。今日はじめて声をかけてきたのに、前から知り合いだったかのような千景の人懐っこさが人みしりの激しい私には少しうらやましく感じた。
ふぅとひとつため息をついて私も家に帰ろうと思い席に立った時だった。足元に黒と灰色と黄色のチェック柄のマフラーが落ちていた。それは声をかけてきたときに千景が身に着けていたもので、主人を見失ってしまったマフラーはさみしそうにぽつんと置き去りにされていた。
私はいそいで彼の後を追って廊下に出たが、その姿はなく、あせっている私の顔をちらっと横目に見た数名の学生たちがいるだけだった。
「困ったな。」
ま、もし今度会ったら返せばいいか。会うことがなかったらどうするつもりだったのかわからなかったけれど、私はマフラーをカバンの中にしまった。

綿あめ。私はかなりずっと昔にお祭りの夜店で買ったそれを弟が食べているところを見たことがある。味の感想を聞いたとき、「ふわふわしていて、口に入れた途端甘く溶けちゃった。」と弟は言っていた。

不思議な食べ物。
未知なる食べ物。

小さいころの記憶だからしっかりとは覚えていないし、実際私は食べたことはなかったけれど彼の笑顔はそれに似ていた。
ふんわりしていて甘くて、不思議な笑顔。

2．はちみつレモンゼリー

昨日はバレンタインデーだった。甘い時間はすぎてしまったが、まだ甘いチョコレートはたくさん残っている。
バレンタインデーは女の子たちがこぞってチョコレートをプレゼントしてくれる。普通の日とは違う特別な日。まるでその日だけに魔法がかけられたかのように女の子たちはチョコレートを渡してくれる。
魔法が永遠に解けなければいいのに。
そうすれば毎日チョコレートをもらえるのに。
毎年毎年そう思うのだが、もちろん俺には魔法を扱うような技術もオカルト知識もあるわけがなく、過ぎ去ってしまった日を少し寂しい思いで振り返る。
今年も袋いっぱいにもらえて機嫌が良かった。

三度の飯より甘いものが好き。

今日は春休み中ということもあって、友人二人と街に出かける約束をしていた。俺は朝ごはんに昨日もらったチョコパウンドケーキを食べ、口の中に甘さを残したままアパートを出た。少々遅刻だが大丈夫だろうなんて暢気なことを考えながら待ち合わせ場所へ向かうと、駅前にはすでに二人の姿があった。
うらやましいくらいの背の高さが自慢の橘幸人（たちばなゆきと）。そのとなりには黒ぶち眼鏡をかけた井上直康（いのうえなおやす）がたっている。
「おまたせ～。二人とも早くない？」
「いや、時計を見てみろ。待ち合わせ時間を15分も過ぎてるぞ。」
直康が間髪いれずにぴしゃりと言った。

「ごめん、ごめん。で、今日はどこ行く？」
俺は手を合わせて軽く謝ると、
「そうだな…、とりあえず千景の時計を１５分はやめることから始めようか。」
と直康が容赦ない言葉を言い、それに便乗して、
「いや、念のために２０分にしといたほうがいいんじゃない？」
と橘が言って、意地悪そうに笑った。
俺たちは昼ご飯を食べるために駅前のファーストフード店に入った。平日にもかかわらずにぎやかな店内。隣の席には３人組の女子高生たちがけらけらと笑いながら話している。おれはしめのチョコ味シェイクをのみながら昨日の出来事を思い出した。
「そういえば、昨日、うわさの伊達さん見たよ。」
「マジで？話したの？」
ストローから口を離して興味津津の目で橘は聞いてきた。
「うん、なんかチョコもらっててさ、困ってたみたいだったから、ちょっとだけ一緒に食べてあげた。むしろ全部もらってあげたかったけど、俺もさすがにそこまで図々しくないからなぁ。」
「なんだそれ。想像するだけでも不思議な光景だな。って、やっぱり伊達さんはもらう側なんだ。」
直康が面白そうに笑った。
「で、メアドはゲットした？」
ぐっと身をのりだして橘が聞いてきた。その眼にはなぜか期待の色がうかがえる。
「え、なんで？手に入れてないよ。…橘、伊達さんに何か用があったの？」
その言葉を聞いたとたん、はぁとため息が聞こえて、呆れかえった声がおれを罵った。
「お前バカか？あの伊達さんにしゃべりかけたにも関わらず、なんでメアドゲットしないんだよ。何のために声かけたんだよ。」
橘はがっくりと肩を下ろし、のりだした身を元の席に預けた。

「何のためにって、そりゃぁチョコのために…。」
「だよな。それがお前だもんな。期待した俺が馬鹿だったよ。」
再びため息を落とした橘は残っていたコーラをズズっと飲みほした。
「だって、かわいそうじゃないか！！どうみても伊達さんは甘いものが苦手のようだったんだ。きっともらったチョコは食べないで処分するつもりだったんだよ。甘い物たちがたどっていく末路を考えたら…いてもたってもいられなくなったおれは声をかけてたのさ。」
食べ物を粗末にしてはいけないという意味を含めてみたが、ようは自分が食べたかった。
「それでこそ、千景だ。」
うんうんとうなずいて直康はさわやかに笑ったが、俺にはあの黒ぶち眼鏡を通して馬鹿にされているのがわかった。
「あ、下の名前はゲットしたよ。透子っていうらしいよ。透き通るっていう字で透子。いい名前だよな。」
「たぶんそれ知らなかったのはお前ぐらいなもんだよ。」
はぁーとため息交じりに橘は言った。
なんだか今日はため息デイだ。
「なんだ、知ってたんだ。あ、ため息つくと幸せが逃げるよ。」
「誰のせいだと思ってる？」
親切に忠告してあげたのに橘ははぁとまたため息をついた。

長い春休みも半分を過ぎたところ、俺は春休みの課題を終わらせるために学校に来ていた。朝から建築学部棟の製図室で三角定規や図面とにらめっこをしていたが、休憩ついでに昼ご飯を食べるため、橘と直康を誘って食堂へ向かった。
「おお、寒っ！はやく食堂行こう。」
橘が大きな身体を縮ませて、ぶるっと身震いをした。
「あれ、お前いつものマフラーしてないじゃん。」
ふと出た直康の言葉に俺は今更ながらに気がついた。

「そういえば首が寒い…。」
ここは日本の北のほうに位置するから、3月といえどもまだまだ寒さが身にしみる。
よくよく考えてみたらいつものマフラーがなかった。
「どこにいったんだろう…。」
「ばっかだなー。部屋のどこかに埋もれてるんじゃね？」
マフラーの行方を考えたけれど、今の俺には『ご飯』が頭の中の大半を占めていた。

今朝は寝坊をして朝食抜きだったので俺はかなりお腹がすいていた。お決まりのコロッケカレーを夢中になって食べているときだった。
「おい。」
直康が俺に言った。少し驚いた目を俺の後ろに向けている。何だろうと思ってその目のあとをたどって後ろを振り返ると、黒髪のショートの女の子が立っていた。
伊達透子だった。隣に座っていた橘が失礼なくらいに透子の顔をじっと見ている。透子はそんなことにひるむわけもなく淡々と話した。
「マフラー。このまえ落としていったから、今度会ったら渡そうと思って。」
「あ…！」
彼女の手にはご無沙汰の見慣れたマフラーがあった。噂をすれば影とはこのことだなと思った。
「寒いから困ってると思ってたんだけど…よかった、寒いうちに渡すことができて。」
すっと手渡されたマフラーを受け取って、はっと気付いた。
「え、毎日持ち歩いてたの？」
「だっていつ会えるかわからないし。もし会わなかったら処分しようと思ってた。」
残酷な言葉が最後のほうに聞こえたが俺は気に留めなかった。そんなことよりも他人のマフラーを毎日持ち歩いて、いつ会えるのかわ

からない持ち主に渡そうとしていた透子の意外に律義な一面を知って少し驚いていた。
その行動が無表情な顔に似合わずなんだか面白かった。
まあ確かに毎日持っていればいつかは俺に渡せることができるかもしれない。
「ありがとう！」
「ん。」
短く返答した彼女はさっさとその場を立ち去ってしまった。言葉も態度もそっけない感じだったが、少しあったかくなっているマフラーを手にしたら彼女の表面上には出てこない温かさを感じた。
「うっわぁ、あんなに近くで見たの初めてだよ。やっぱマジ、綺麗だな。」
まだ食堂の中を歩いている透子には聞こえないように少し控えめな声で橘は言った。確かに俺も初めて噂の張本人を目にしたときはきれいだなとは思った。でもそれは俺が今まで思っていた綺麗な女の子とは違う区分に入るような気がした。
「たしかに、伊達さんって純粋な綺麗さがあるよな。うちの学科の女子とか、まぁ一般的な女性と比べると化粧は薄いし、華やかな雰囲気はないんだけど。静かな美人って感じだ。」
まるで実験結果を分析するように透子の見目を的確な言葉でまとめた直康に感心した。
「やっぱり、透子さんってもてるの？」
「なんだよ、千景、伊達さんのこと名前で呼んじゃって。」
「え、だって透子さんって呼ぶほうが親しみがあっていいじゃん。お前もそうすればいいのに。」
「橘、こいつはそういうのには疎いから。」
「あ、そうだっけな。そうだな、俺が聞いたのは5人くらいかな。」
5人っていうのはおそらく告白された人数だろう。
「その5人ってのが、またすごいメンバーでさ。伊達さんと同じ文学部の林純介と、経済の三橋と、あと俺らの先輩の谷口さんと、あ

とは…。」
橘が名前を挙げた者たちはこの大学屈指のいい男だらけで俺はすごい、透子さんモテモテじゃんと尊敬の念を込めて驚いた。
「なんだ。本当に千景は伊達さんのこと意識したりしてないんだな。」
いかにもつまらないといったような顔の直康に俺は
「なんだよつまらなそうな顔をして。」
と不思議そうに言った。
「お子様だもんな、千景は。」
「お子様で悪かったな。」
俺はぶすっと言って食後のデザートにはちみつレモンゼリーを食べた。
さっぱりしていて自然な甘さ。
そういえば透子もそんな感じだなと俺は頭の片隅で思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5178m/

バニラアイスにエスプレッソをかけて

2010年10月11日00時11分発行